

■晉、成漢李氏蜀、▲慕容氏、続国訳漢文大成。經子史部 第 5 卷 203p

【晉紀七】起昭陽大淵獻，盡閼逢困敦，凡二年。

孝惠皇帝中之下太安二年（癸亥，303年）

【李特は敗死し李流立つ】

成漢 李特と羅尚の和睦 春，正月，李特は潜かに江を渡りて羅尚を撃ち，水（郫水）上の軍は皆な散り走る。蜀郡太守の徐儉は少城を以て降り，特は入りて之に據る，惟だ馬を取り以て軍に供し，餘は侵掠する無く，其の境内に赦し，改元して建初とす。羅尚は太城を保ち，遣使して和を特に求める。蜀の民は相い聚りて塢を為る者，皆な款を特に送る，特は遣使して就きて之を撫す。軍中の糧少なきを以て，乃ち六郡の流民を分けて諸塢に於いて食に就かしむ。李流は特に言つて曰く、

「諸塢は新附なり，人心は未だ固まらず，宜しく其の大姓の子弟を質とし，兵を聚めて自ら守り，以て不虞に備えるべし。」

又た特の司馬の上官惇に書を與えて曰く、

「降るを納れるは敵を待つが如し，易かる可からざる也。」（偽り降るを恐れる）

前將軍の雄も亦た以て言を為す。特は怒りて曰く、(5-204p)

「大事は已に定まる，但だ當に民を安んずべし，何為れぞ更に逆（予め）に疑忌を加え，之を離叛せ使めん乎！」

■成漢 李特は羅尚の策にはまり戦死 朝廷は荊州刺史の宗岱、建平太守の孫阜を遣わして水軍三萬を帥いて以て羅尚を救わしむ。岱は阜を以て前鋒と為し，進みて德陽（四川省嘉陵道遂寧県の東南、李特は廣漢を分けて德陽郡を立てる、現・德陽市か）に逼る。特は李蕩及び蜀郡太守の李璜を遣わして德陽太守の任臧に就き共に之を拒ましむ。岱、阜の軍勢は甚だ盛んなり，諸塢は皆な貳志（裏切り天秤）有り。益州の兵曹從事の蜀郡の任睿は羅尚に言つて曰く、

「李特は衆を散じて食に就かしめ，驕怠して備え無し，此れ天亡ぼす之時也。宜しく諸塢と密約し，期を刻して同じく發し，内外之を撃てば，之を破るは必ずなり矣！」

尚は睿をして夜緹（縄に縄）して城を出で使め，諸塢に宣旨し，二月十日を以て同じく特を撃たんと期す。睿は因りて特に詣りて詐り降る。特は城中の虚實を問ひ，睿は曰く、

「糧儲は將に盡きんとし，但だ貨帛を餘す耳。」

睿は出でて家を省せんと求め，特は之を許す，遂に還りて尚に報ず。二月，尚は兵を遣わして特の營を掩襲し，諸塢は皆な之に應じ，特の兵は大敗し，特及び李輔、李遠を斬り，皆な屍を焚き，首を洛陽に傳える。流民は大いに懼れ，李流、李蕩、李雄は餘衆を收めて還りて赤祖（綿竹の東、四川省西川道德陽県、現・德陽市旌陽区）を保つ。流は自ら大將軍、大都督、益州牧を稱し，東宮を保ち，蕩、雄は北營を保つ。孫阜は德陽を破り，蹇碩，任臧を獲り退きて涪陵（四川省東川道涪陵県治、現・重慶市涪陵區）に屯す。

成漢 李流は反乱で苦戦し、また成都に迫る 三月，羅尚は督護の何冲、常深等を遣わして李流を攻め，涪陵の民の藥紳等も亦た兵を起こして流を攻める。流は李驤と深を拒み，李蕩、李雄をして紳を拒ま使む。何冲は虚に乗りて北營を攻め，氏の苻成、隗伯は營中に在り，叛して之に應ず。蕩の母の羅氏は甲を擐きて拒み戦ひ，伯は手刃して其の目を傷つけ，羅氏の氣は益々壯なり。營は破れるに垂々とし，會々

流等は深、紳を破り、兵を引いて還り、沖等と戦い、大いに之を破り、成、伯は其の黨を帥いて突出して尚に詣る。流等は勝ちに乗りて進みて成都に^{いた}抵り、尚は復た閉城して自ら守る。蕩は馬を馳せて北^{ほく}げるを逐い、矛に中たり而して死す。

■【晉の朝廷は蜀支援軍再派遣】朝廷は侍中の燕國の劉沈を遣わして節を假して羅尚（益州の兵）、許雄（梁州の兵）等の軍を統べ、李流を討たしむ。行きて長安に至り、河間王の顥は沈を留めて軍師と為し、^{せきい}席遠を遣わして之に代える。

成漢【李流は恐れ、李雄が登場し主導】李流は李特、李蕩の繼いで死し、宗岱、孫阜の將に至らんとするを以て、甚だ懼れる。李含は流に降るを勧め、流は之に従う。李驤、李雄^{たが}は迭いに諫め、納れず。夏、五月、流は其の子の世及び含の子の胡を遣わして阜の軍の質と為す。胡の兄の離は梓潼太守^な為り、之を聞き、郡より馳せ還り、諫めんと欲し及ばず。退きて、雄と阜の軍を襲わんと謀り、雄は曰く、「今の計を為すに、當に是くの如し、而れども二翁は従わず、奈何せん？」

離は曰く、

「當に之を^{おびや}劫かす耳！」

雄は大いに喜び、乃ち共に流民に説いて曰く、

「吾が屬は前に已に蜀の民を殘暴す、今一旦手を束ねれば、便ち魚肉と為らん。惟だ心を同じくして阜を襲い、以て富貴を取る有る耳！」（5-205p）

衆は皆な之に従い。雄は遂に離と阜の軍を襲撃し、大いに之を破る。會々宗岱は墊江（四川省東川道合川県治・重慶市墊江県）に卒し、荊州の軍は遂に退く。流は甚だ慚じ、是に由りて雄の才を奇として、軍事は悉く以て之に任ず。

【張昌の反乱で漢の後継を名乗る】

■【司馬歆に張昌の反乱】新野の莊王の歆は、政を為すこと嚴急にして、蠻夷の心を失う、義陽（河南省汝陽道桐柏県の東 or 信陽県南、現・南陽市桐柏県）の蠻の張昌は黨數千人を聚め、亂を為さんと欲す。荊州は壬午の詔書を以て武勇を發し益州に赴きて李流を討ち、「壬午兵」と號す。民は遠征を憚り、皆な行くを欲せず。詔書して督遣なること嚴急にして、經る所之界停留すること五日なる者は、二千石を免ず。是に由りて郡縣の官長は皆な親ら出でて驅逐する。展轉すること遠からず、輒ち復た屯聚して群盜を為す。時に江夏は大いに稔り、民の食に就く者は數千口。張昌は之に因りて百姓を誑惑し、姓名を更めて李辰と曰い、衆を安陸（江夏郡に属す、湖北省江漢道安陸県、現・孝感市安陸市）の石巖山に募め、諸々（続、請×）の流民及び戍役を避ける者多く往きて之に従う。太守の弓欽は兵を遣わして之を討ち、勝たず。昌は遂に郡を攻め、欽の兵は敗れ、部將の朱伺と武昌に奔り、歆は騎督の靳滿を遣わして之を討ち、滿は覆た敗走す。

■【張昌は漢の後を語る】昌は遂に江夏（安陸県治）に據り、妖言を造りて云う、

「當に聖人有り出でて民主と為るべし。」

山都（晉の襄陽郡に属す、湖北省襄陽道襄陽県西北、208 年曹操が南郡の編県以北と南陽郡の山都県を合わせて襄陽郡を置く、襄陽郡現・襄陽市、南陽側）縣吏の丘沈を得、其の姓名を更め劉尼と曰い、漢の後と詐りて雲い、奉じて以て天子と為して、曰く、

「此れは聖人也。」

昌は自ら相國と為り、詐りて鳳皇、玉璽之瑞を作り、神鳳と元（元号）を建（続は改）てる。郊禮、服色は、悉く漢の故事に依る。募に應ぜざる者有れば、之を族誅し、士民は敢えて従わざる莫し。又た流言す、

「江、淮已南は皆な反し、官軍は大いに起こる、當に悉く之を誅すべし。」

互いに相い扇動し、人情は惶懼す。江、沔の間は所在に兵を起こし以て昌に應じ、旬月の間に衆は三萬に至り、皆な絳帽を著け、馬尾を以て髯を作る。詔して監軍の華宏を遣わして之を討ち、障山（安陸県東南）に敗る。

■「劉喬は張昌を討伐へ」歆は上言す、

「妖賊犬羊は萬を計り、絳頭毛面し、刀を挑^{ふろ}い戟を走らせ、其の鋒は當る可からず。請う諸軍に台救し三道より救助すべし。」

朝廷は屯騎校尉の劉喬を以て豫州刺史と為し、寧朔將軍（初めてここに見える官）の沛國の劉弘を荊州刺史と為す。又た河間王の顒に詔して雍州刺史の劉沈を遣わして州兵萬人を將し、征西府の五千人を並せて藍田（陝西省關中道藍田県東南、現・西安市藍田県）頭（統は關）に出でて以て昌を討たしむ。顒は詔を奉じず。沈は自ら州兵を領して藍田に至り、顒は又た逼りて其の衆を奪う。是に於いて劉喬は汝南に屯し、劉弘及び前將軍の趙驤、平南將軍の羊伊は宛に屯す。昌は其の將の黃林を遣わして二萬人を帥いて豫州に向かい、劉喬は撃ちて之を卻く。

■「新野莊王歆は戦死」初め、歆は齊王の問と善し（前卷永寧元年にあり）、問は敗れ、歆は懼れ、自ら大將軍の穎と結ぶ。張昌の亂を作るに及び、歆は表して之を討つを請う。時に長沙王の乂は已に穎と隙有り、歆が穎と連なりて謀るを疑い、歆の兵を出すを聽さず、昌の衆は日々盛んなり。從事中郎の孫洵は歆に謂って曰く、(5-206p)

「公は岳牧（吉に四岳十二牧あり、各々諸侯の國を統べる、故に方面を専らにするをいう）為^なり、閫外（數居の外。戸外）之托を受ける、拜表して輒ち行くも、何の不可有らん！而るに奸凶をして滋蔓使めれば、禍釁は測らず、豈に王室の藩翰（藩と幹）として、方夏を鎮靜する之義を乎！」

歆は將に兵を出さんとし、王綏は曰く、

「昌等は小賊なり、偏裨の自ら之を制するに足りん、何ぞ必ずしも詔命に違いて、矢石を親らせん也！」昌は樊城に至り、歆は乃ち出でて之を拒む。衆は潰え、昌の殺す所と為る。詔して劉弘を以て歆に代わり鎮南將軍、都督荊州諸軍事と為す。六月、弘は南蠻長史（南蠻校尉に司馬・長史あり）の廬江の陶侃を以て大都護と為し、參軍の蒯恒を義軍（義勇兵・民兵）督護と為し、牙門將の皮初を都戰帥と為し、進みて襄陽に據る。張昌は軍を並せて宛を圍み、趙驤の軍を敗り、羊伊を殺す。劉弘は退きて梁（梁県は汝南郡に属す）に屯す。昌は進みて襄陽を攻め、克たず。

成漢李雄は攻めて汶山太守の陳圖を殺し、遂に郫城（蜀郡に属す、四川省西川道郫県、現・成都市郫都区・都心）を取る。

成漢「徐輿は羅尚から李流に附く」秋、七月、李流は徒りて郫に屯す。蜀民は皆な險を保ちて塙を結び、或は南に寧州に入り、或は東に荊州に下る。城邑は皆な空しく、野に煙火無く、流は虜掠して得る所無く、士衆は饑乏する。唯だ涪陵の千餘家は、青城山（汶山郡都安県にあり、四川省西川道灌県西南、岷山山脈の第一峰、現・成都市都江堰市、道教の聖地の青城山）の處士の范長生に依る。平西參軍の涪陵の徐輿は羅尚を説き、汶山太守と為り、長生を邀え結び、與に共に流を討たんと求める。尚は許さず、輿は怒り、出でて流に降り、流は輿を以て安西將軍と為す。輿は長生を説き、流に軍糧を資給せ使め、長生は之に従う。流の軍は是に由りて復た振う。

■ **〔諸王相乱れて討伐す〕** 初め、李含は以えらく長沙王の乂は微弱なりて、必ず齊王の冏の殺す所と為らんとし、因りて以て冏の罪と為し而して之を討ち、遂に帝を廢し、大將軍の穎を立て、河間王の顒を以て宰相と為し、己が事を用いるを得んと欲す。既に而して冏は乂の殺す所と為り（前年前卷にあり）、穎、顒は猶ほ籓を守り、謀る所の如くならず。穎は功を恃みて驕奢にして、百度は弛廢すること、冏の時より甚し。猶ほ乂が内に在り、其の欲を逞しくするを得ざるを嫌い、之を去らんと欲す。時に皇甫商は復た乂の參軍と為り、商の兄の（皇甫）重は秦州刺史と為る。含は顒を説いて曰く、（皇甫商と李含は平らかならず、前卷前年にあり）

「商は乂の任ずる所と為り、重は終に人の用を為さず、宜しく早く之を除くべし。表して重を遷して内職と為し、其の長安を過ぎるに因りて之を執る可し。」

重は之を知り、露檄して尚書に上し、隴上の兵（隴より西の六郡は秦州に統べらる）を發して以て含を討つ。乂は兵が方に少しく息むを以て、遣使して重に詔して兵を罷めしめ、含を征して河南尹と為す。含は征に就き而して重は詔を奉じず、顒は金城太守の游楷、隴西太守の韓稚等を遣わして四郡の兵を合わせて之を攻める。顒は密に含をして侍中の馮蓀、中書令の卞粹と乂を殺さんと謀ら使む。（5-207p）皇甫商は以て乂に告げ、含、蓀、粹を収め、之を殺す。驃騎從事の琅邪の諸葛玫、前の司徒（司空に作るべし）長史の武邑の牽秀は皆な出でて鄴に奔る。

■ **〔張昌一派の席卷〕** 張昌の黨の石冰は揚州を寇し、刺史の陳徽を敗り、諸郡は盡く沒す。又た攻めて江州を破り、別將の陳貞等は武陵、零陵、豫章、武昌、長沙を攻め、皆な之を陷す、臨淮の人の封雲は兵を起こして徐州を寇し以て冰に應じる。是に於いて荆、江、揚、豫、徐の五州之境は、多く昌の據る所と為る。昌は更に牧守を置き、皆な桀盜小人にして、専ら劫掠を以て務と為す。

■ **〔陶侃の反撃〕** 劉弘は陶侃等を遣わして昌を竟陵（湖北省襄陽道鍾祥県、現・荊門市鍾祥市）に攻め、劉喬は其の將の李楊等を遣わして江夏に向かわしむ。侃等は屢々昌と戦い、大いに之を破り、前後斬首は數萬級なり、昌は下俊山（長沙の下隲県の山、湖南省辰沅道沅陵県、現・懷化市沅陵県）に逃げ、其の衆は悉く降る。

■ **〔陶侃の生い立ち〕** 初め、陶侃は少くして孤貧なり、郡の督郵と為る。長沙太守の萬嗣は廬江を過ぎ、見て而して之を異とし、其の子に命じて友を結び而して去る。後に孝廉に察せられ、洛陽に至る、豫章國（帝の弟熾は豫章王に封じられる）の郎中令の楊卓は之を顧榮に薦め、侃は是に由りて名を知られる。既に張昌に克ち、劉弘は侃に謂って曰く、

「吾は昔羊公（羊結）の參軍な為り、（羊公は）吾謂うに、（卿は）後は當に身（羊公自身）の處に居るべしと、今卿を觀るに、必ず老夫に繼がん矣。」

■ **〔劉弘の政治の名声〕** 弘之退きて梁に屯する也、征南將軍の范陽王の虓は前の長水校尉の張奕を遣わして荊州を領せしむ。弘は至るや、奕は代を受けず、兵を擧げて弘を拒む。弘は奕を討ち、之を斬る。時に荊部は守宰多く缺け、弘は選を補うを請い、詔して之を許す、弘は功を敘し徳を銓り、才に隨いて任を授け、人は皆な其の公當に服す。弘は皮初を表して襄陽太守に補し、朝廷は初は功有りと雖も而して望淺き以て、更に弘の婿の前の東平太守の夏侯陟を以て襄陽太守と為す。弘は教を下して曰く、

「夫れ一國を治める者は、宜しく一國を以て心と為すべし、必ず若し姻親にして然る後に用いる可し、則ち荊州の十郡（荊州は初め 22 郡、既に襄陽・武昌・安成を分けて江州に属し 19 郡。新城・魏興・上庸を梁州に分けて 16 郡。懷帝の時長沙・衡陽・零陵・邵陵・桂陽を分けて 11 郡。そのうち 10 郡が太守を欠く）は、安んぞ十女婿を得て然る後に政を為さん哉！」

乃ち表す、

「陟は姻親にして、舊制には相い監するを得ず。皮初之勳は、宜しく酬報せらるべし。」
詔して之を聽す。弘は是に於いて農桑を勸課し、刑を寛くして賦を省き、公私は給足し、百姓は愛悦す。

■ 〔河間王顥らは長沙王乂を討伐〕 河間王の顥は李含等の死するを聞き、即ち兵を起こして長沙王の乂を討つ。大將軍の穎は上表して張昌を討つを請い、之を許す。昌の已に平らぐを聞き、因りて顥と共に乂を攻めんと欲す。盧志は諫めて曰く、

「公は前に大功有り（前卷永寧元年にあり）而して權を^す委て寵を辭し、時望は美なり矣。今宜しく軍を關外（郊關の外）に頓め、文服して入朝すれば、此れ霸主之事也。」（5-208p）

參軍の魏郡の邵續は曰く、

「人之兄弟有るや、左右の手の如し。明公は天下之敵に當たらんと欲し而して先ず其の一手を去るは、可なる乎！」

穎は皆な従わず。八月、顥、穎は共に表す、

「乂は功を論じること平かならず、右僕射の羊玄之、左將軍の皇甫商と與に専ら朝政を擅にし、忠良（李含等）を殺害す。請う玄之、商を誅し、乂を遣りて國に還らしめん。」

詔して曰く、

「顥は敢て大兵を舉げ、内は京輦に向う、吾は當に親ら六軍を帥いて以て奸逆を誅さん。其れ乂を以て太尉、都督中外諸軍事と為し、以て之を御がしめん。」

■ 〔司馬顥は張方と、司馬穎は陸機・牽秀・石超と洛陽に向かう〕 顥は張方を以て都督と為し、精兵七萬を將い、函谷より東に洛陽に趨かしむ。穎は兵を引いて朝歌に屯し、平原内史の陸機を以て前將軍と為し、前鋒都督、督北中郎將の王粹、冠軍將軍の牽秀、中護軍の石超等軍二十餘萬、南に洛陽に向かわしむ。機は羈旅を以て穎に事え、一旦頓^{にわか}に諸將之右に居る、王粹等は心は皆な服さず。白沙（鄴城の東南）の督の孫惠は機と親厚にして、機に都督を粹に譲るを勧める。機は曰く、

「彼は將に吾を首鼠兩端（漢の田蚡の語。鼠の性は疑い深く穴を出て觀望し、進退容易に決せず。故に兩端を持するものを喩える）すと謂わんとし、適々^{たまたま}禍いを速く^{まね}所以也。」

遂に行く。穎は軍を列べて朝歌（河南省河北道淇県、現・鶴壁市淇県）より河橋（富平津の河橋、河南省河北道孟県、現・焦作市孟州市）に至り、鼓聲は數百里に聞こえる。

■ 〔皇帝は司馬乂側で親征〕 乙丑（1+60-38+1=24 日）、帝は十三里橋（洛城を去る西 13 里）に如く。太尉の乂は皇甫商をして萬餘人を將いて張方を宜陽に拒ま使む。己巳（5+60-38+1=28 日）、帝は還りて宣武場に軍し、庚午（6+60-38+1=29 日）、石樓に捨す。九月、丁丑（13-8+1=6 日）、河橋に屯す。壬午（18-8+1=11 日、壬子×）、張方は皇甫商を襲い、之を敗る。甲申（20-8+1=13 日）、帝は芒山に軍す。丁亥（23-8+1=16 日）、帝は偃師（洛陽東北の県）に幸す。辛卯（27-8+1=20 日）、豆田（洛陽城東）に捨す。大將軍の穎は進みて河南（黄河の南）に屯し、清水を阻みとして壘と為す。癸巳（29-8+1=22 日）、羊玄之は憂懼し而して卒す、帝は軍を城東に旋す。丙申（32-8+1=25 日）、緱氏（中国河南省にあった山の名）に幸し、牽秀を撃ち、之を走らす。大赦す。張方は京城に入り、大掠し、死者は萬計なり。

成漢 〔蜀は李流死して李雄立つ〕 李流の疾は篤く、諸將に謂って曰く、

「驍騎（將軍、李特は弟驤を任じる）は仁明なり、固より以て大事を濟すに足る。然るに前軍（將軍、少子の李雄）は英武にして、殆んど天の相ける所なり、共に事を前軍に受ける可し。」

流は卒し、衆は**李雄**を推して大都督、大將軍、益州牧と為し、郫城に治す。**雄**は武都の**樸泰**（続は朴泰、板楯七姓の蠻の種）をして**羅尚**を給か使め、郫城を襲わ使め、

「己は内應を為さん。」

と雲わしむ。**尚**は**隗伯**（流民の豪傑、先に叛きて羅尚に附く）をして兵を將いて郫を攻め使め、**泰**は約すに、
「火を舉げて應と為さん」

と、**李驤**は兵を道に伏し、**泰**は長梯を外に出す。**隗伯**の兵は火起こるを見、争いて梯に縁いて上り、**驤**は兵を縦ちて撃ち、大いに之を破る。奔るを追いて夜城下に至り、詐りて萬歳を稱し、曰く、
「已に郫城を得たり矣！」

少城に入り、**尚**は乃ち之を覺り、退きて太城を保つ。**隗伯**の創は甚しく、**雄**は之を生け獲りにし、赦して殺さず。（5-209p）**李驤**は犍為を攻め、**尚**の運道を斷つ。太守の**龔恢**を獲り、之を殺す。

【司馬穎陣營の内紛】

■ 「司馬乂は洛陽を防衛」 **石超**は進みて緱氏に逼る。**冬、十月**、壬寅（38-37+1=2 日）、**帝**は宮に還る。丁未（43-37+1=7 日）、**牽秀**を東陽門（洛陽城の中東門）外に敗る。大將軍の**穎**は將軍の**馬咸**を遣わして**陸機**を助ける。戊申（44-37+1=8 日）、太尉の**乂**は**帝**を奉じて**機**と建春門（洛陽城の上東門）に戦う。**乂**の司馬の**王瑚**は數千騎をして戟を馬に繋ぎ、以て**咸**の陳を突か使め、**咸**の軍は亂れ、執り而して之を斬る。**機**の軍は大敗し、七里澗に赴き、死者は積むが如し、水は之が為に流れず。其の大將の**賈崇**等十六人を斬り、**石超**は遁げ去る。

■ 「宦官の孟玖の陰謀、司馬穎は陸機を殺す」 初め、宦官の**孟玖**は大將軍の**穎**の寵有り、**玖**は其の父を用いて邯鄲令と為さんと欲し、左長史の**盧志**等は皆な敢えて違わず、右司馬の**陸雲**は固く執りて許さず、曰く、

「此の縣（を歴る者）は、公府の掾の資（資級）なり、豈に黃門の父之に居る有らん邪！」

玖は深く之を怨む。**玖**の弟の**超**は、萬人を領して小督（晉書陸機傳には小都督）と為る、未だ戦わず、兵を縦ちて大掠し、**陸機**は其の主者を録す。**超**は鐵騎百餘人を將いて直ちに**機**の麾下に入り、之を奪い、顧みて**機**に謂いて曰く、

「貉（獸の名、陸機を侮る）奴は、能く督と作るや不や！」

機の司馬の吳郡の**孫拯**は**機**に之を殺すを勧め、**機**は用いる能わず。**超**は衆に宣言して曰く、

「**陸機**は將に反せんとす。」

又た還りて書して**玖**に與えて、言わく、

「**機**は兩端を持ち、故に軍は速かに決せず。」

戦うに及びて、**超**は**機**の節度を受けず、輕兵は獨り進み、敗没す。**玖**は**機**は之を殺すと疑いて、之を**穎**に譖りて曰く、

「**機**は長沙に二心有り。」

牽秀は素より**玖**に^{〜つら}諷い事え、將軍の**王闡**、**郝昌**、帳下督（諸王侯方面軍にあり）の**陽平**（郡名、魏文帝黃初二年に魏郡を分ける）公の**師籓**は皆な**玖**の引き用いる所なり、相い與に共に之を證す。**穎**は大いに怒り、**秀**をして兵を將いて**機**を収め使む。參軍事の**王彰**は諫めて曰く、

「今日之舉は、強弱は勢いを異にす。庸人すら猶ほ必ず克たんと知る、況んや**機**之明達を乎！但だ**機**は吳人にして、**殿下**は之を用いること太だ過ぎたり、北土の舊將は皆な之を疾む耳。」

穎は従わず。機は秀の至るを聞き、戎服を釋き、白帢（白い帽子）を著、秀と相い見、箋を為りて穎に辭し、既に而して歎じて曰く、

「華亭（呉郡の地名、江蘇省滬海道松江県の西の平原村は昔の華亭谷、唐時代は華亭県、陸機の故宅、鶴がいた、現・上海市松江区小崑山鎮平原社区）の鶴唳は、復た聞く可けん呼！」

秀は遂に之を殺す。穎は又た機の弟の清河内史の雲、平東祭酒の耽及び孫拯を收め、皆な獄に下す。

■ 〔孫拯の陸兄弟への忠節〕 記室の江統、陳留の蔡克、穎川の棗嵩等は上疏し、以為く、

「陸機は謀り淺く敗に致る、之を殺すも可也。反逆に至りては、則ち衆は共に其の然らざるを知る。宜しく先ず機の反狀を検校し、若し徵驗有れば、雲等を誅するも未だ晩からざる也。」

統等は懇請して已まず、穎は遲回する者は三日。蔡克は入り、穎の前に至り、叩頭流血し、曰く、

「雲は孟玖の犯（統は怨）す所と為り、遠近は聞かざる莫し。今果たして殺さ見る、竊かに明公の為に之を惜しむ！」

僚屬の克に隨いて入る者は數十人、(5-210p) 流涕して固く請い、穎は惻然として、雲を宥す之色有り。

孟玖は穎を扶けて入り、^{うなが}催して雲、耽を殺し、機の三族を夷げ令む。獄吏は孫拯を考掠すること數百、兩踝（太腿の両傍ら）は骨見われ、終に機の冤を言う。吏は拯の義烈を知り、拯に謂って曰く

「二陸之枉は、誰か之を知らざる、君は身を愛せざる可けん乎！」

拯は仰天して歎じて曰く、

「陸君兄弟は、世之奇士なり、吾は知愛を蒙り、今既に其の死を救う能わず、復た従い而して之を誣うるに忍びん乎！」

玖等は拯の屈す可からざるを知り、乃ち獄吏をして詐りて拯の辭を為ら令む。穎は既に機を殺し、意は常に之を悔い、拯の辭を見るに及び、大いに喜び、玖等に謂って曰く、

「卿之忠に非ざれば、此の奸を窮める能わず。」

遂に拯の三族を夷ぐ。拯の門人の費慈、宰意の二人は獄に詣りて拯の冤を明らかにす、拯は^{きと}譬して之を遣りて曰く、

「吾は義は二陸^{そむ}に負かず、死は自ら吾が分なり。卿は何為れぞ爾^{しか}る邪！」

（二人は）曰く、

「君は既に二陸に負かず、僕は又た安んぞ君に負く可けんや！」

固く拯の冤を言い、玖は又た之を殺す。

■ 〔司馬乂と張方の攻防〕 太尉の乂は帝を奉じて張方を攻め、方の兵は乘輿を望見し、皆な退き走り、方は遂に大敗し、死（続、死オ×）するは五千餘人。方は退きて十三里橋に屯し、衆は懼れ、夜遁げんと欲し、方は曰く、

「勝負は兵家之常なり、善く兵を用いる者は能く敗に因りて成を為す。今我は更に前みて壘を作り、其の不意に出でん、此れ奇策也。」

乃ち夜潜かに進み、洛城の七里に逼り、築壘すること數重、外に廩谷を引いて以て軍食を足らす。乂は既に戦勝し、以為えらく方は憂うるに足らずと。方の壘成ると聞き、十一月、兵を引いて之を攻め、利あらず。朝議以えらく、乂は兄弟なりて、辭説し而して釋く可しと、乃ち中書令の王衍等をして往きて穎を説か使め、（穎をして）乂と陝（弘農を境界とする、周公・召公の二伯になぞらえる）を分け而して居ら令めんとするも、穎は従わず。乂は因りて書を穎に致し、為に利害を陳じ、之と和解せんと欲し、穎は復書す、

「請う**皇甫商**等の首を斬るべし、則ち兵を引いて鄴に還らん。」

又は可とせず。**穎**の兵は進みて京師に逼り、**張方**は千金塙（河南郟城の東、穀水）を決し、水碓は皆な涸れる。乃ち王公の奴婢を發して手づから舂^{うす}づきて兵に給し、一品已下の征に従わざる者は、男子十三以上は皆な役に従う、又た奴を發して兵を助けしむ。公私は窮蹶（窮蹶）し、米石は萬錢となる。詔命の行なう所、一城に而して已む。驃騎（將軍）の主簿の范陽の**祖逖**は又^又に言つて曰く、

「**劉沈**の忠義は果毅にして、雍州の兵力は河間を制するに足る、宜しく上に啟し詔を為りて**沈**に與え、（沈をして）兵を發して**顓**を襲わ使む。**顓**は窘急し、必ず**張方**を召して以て自ら救わんとす、此れ良策也。」

又は之に従う。**沈**は詔を奉じて馳せて四境に檄し、諸郡は多く兵を起こして之に應じる。**沈**は七郡（雍州治下七郡、安帝に治す、あるいは新平に治すとも）之衆を凡そ萬餘人合わせて、長安に趣く。

■ 【又の皇甫商は誅殺される】 又は又た**皇甫商**をして間行して、帝の手詔を繼が使め、**游楷**等に命じて兵を罷ましめ、**皇甫重**に敕して軍を進めて**顓**を討たしむ。**商**は間行して新平に至り、（5-211p）其の從甥に遇い、從甥は素より**商**を憎む、以て**顓**に告げ、（顓は）**商**を捕り、之を殺す。

■ 【揚州の反乱】 **十二月**、議郎の**周玘**、前の南平（吳は南郡を江南に置く、晉が吳を平らげて南平といい、江北の南郡に分ける）内史の長沙の**王矩**は兵を江東に起こし以て**石冰**を討ち、前の吳興太守の吳郡の**顧秘**を推して揚州（18郡の7郡を江小に分け11郡）九郡（丹陽・吳興など）諸軍事を都督せしめ、檄を州郡に傳え、**冰**の署する所の將吏を殺す。是に於いて前の侍御史の**賀循**は兵を會稽に起こし、廬江内史の廣陵の**華譚**及び丹陽の**葛洪**、**甘卓**は皆な兵を起こして以て**秘**に應じる。**玘**は、**處**（82 卷元康六七年にあり）之子。**御**は、**邵**（吳主皓に事える）之子。**卓**は、**寧**（甘寧、孫權に事える）之曾孫也。

■ 【逃亡する石冰は壽春へ】 **冰**は其の將の**羌毒**を遣わして兵數萬を帥いて**玘**を拒ましめ、**玘**は撃ちて之を斬る。**冰**は臨淮より退きて壽春に趨き。征東將軍の**劉准**は**冰**の至るを聞き、惶懼して為す所を知らず。廣陵度支の廬江の**陳敏**（尚書令より出て合肥度支となり南方の米穀を漕運し、廣陵に移る）は衆を統べて壽春に在り、准に謂つて曰く、

「此等は本より戍を樂しまず、逼迫せられて賊と成り、烏合之衆なり、其の勢いは離れ易く、**敏**は請う運兵を督帥し公の為に之を破らん。」

准は乃ち**敏**の兵を益し、之を撃た使む。

成漢 【李雄は成都攻略】 **閏月**（元嘉曆一月）、**李雄**は急に**羅尚**を攻め。**尚**の軍は食無く、牙門の**張羅**（晉書載記には羅特に作る）を留めて城を守らしむ。夜、牛鞞水（四川省旧成都府を流れて南に降り揚子江に入る川）に由りて東に走り、**羅**は開門して降る。**雄**は成都に入り、軍士は饑えること甚しく、乃ち衆を帥いて穀に鄴（四川省嘉陵道三台県、現・綿陽市三台県）に就き、野芋を掘り而して之を食す。**許雄**（梁州刺史たること前卷太安元年にあり）は賊を討ちて進まざるに坐して、征せられて罪に即く。

■ 【王濬は夷狄と婚姻作戰】 安北將軍、都督幽州諸軍事の**王濬**は、天下方に亂れんとするを以て、援けを夷狄に結ばん欲し、乃ち一女を以て鮮卑の**段務勿塵**に妻あわし、一女を**素怒延**に妻あわし、又た表して遼西郡を以て**務勿塵**を封じて遼西公と為す。**濬**は、**沈**（晉に黨して魏高貴郷公を殺す）之子也。

■ 【於陵丞は李毅を攻める】 **毛詵**之死する也（前卷太安元年にあり）、**李睿**は五苓の夷（寧州の部落の名）帥の**於陵丞**に奔り、**於陵丞**は**李毅**（～306、蜀晉の武將、広漢郡郫県の人）に詣りて**睿**の為に命を請い、**毅**は之を許す。**睿**は至

り、毅は之を殺す。於陵丞は怒り、諸夷を帥いて反きて毅を攻める。

■ 〔五男を以て一女に易えん哉〕 尚書令の樂廣の女は成都王妃と為り、或は諸を太尉の父に譖る。父は以て廣に問い、廣は神色動かず、徐ろに曰く、

「廣は豈に五男を以て一女に易えん哉！」（願に附けば五男誅せられるをいう）

父は猶ほ之を疑う。

孝惠皇帝中之下永興元年（甲子，304年）

（長沙王父の死するや、永安と改元、西に長安に遷して永興に改元）

■ **春，正月**（元嘉曆二月），丙午（42-35+1=8日），樂廣は憂を以て卒す。（5-212p）

■ 〔司馬越は司馬父を誅殺〕 長沙の厲王（長沙王父は其の死を得ず、穎・顓の黨は加えるに悪諺を以てす）の父は屢々大將軍の穎と戦い、之を破り、前後に斬獲するは六、七萬人なり。而して父は未だ嘗て上に奉ずる之禮を虧かず。城中の糧食は日々に窘し、而れども士卒は離心無し。張方は以為えらく洛陽は未だ克つ可からず、長安に還らんと欲す。而るに東海王の越は事の濟らざるを慮り、癸亥（59-35+1=25日）、潜かに殿中の諸將と夜父を収めて別省に送る。甲子（60-35+1=26日）、越は帝に啟し、下詔して父の官を免じ、金墉城に置く。大赦し、改元す。城は既に開き、殿中の將士は外兵の盛んならずを見、之を悔い、更に劫かして父を出して以て穎を拒まんと謀る。越は懼れ、父を殺して以て衆心を絶たんと欲す。黃門侍郎の潘滔は曰く、

「可からず、將に自ら之を靜める者有らん。」

乃ち（人）を遣わして密かに張方に告げしむ。丙寅（2+60-35+1=28日）、方は父を金墉城に取り、營に至り、炙り而して之を殺し、方の軍士は亦た之が為に流涕す。

■ 〔司馬穎は洛陽に入りまた鄴に戻る〕 公卿は皆な鄴に詣りて謝罪す。大將軍の穎は京師に入り、復た還りて鄴に鎮す。詔して穎を以て丞相と為し、東海王の越に守尚書令を加える。穎は奮武將軍の石超等を遣わして兵五萬を帥いて十二城門（洛陽城の東に建春・東陽・清明、南に開陽・津陽・平昌・宜陽、西に廣陽・西明、閭闔、北に大厦・廣莫）に屯せしめ、殿中の宿所に忌む者は、穎は皆な之を殺す。悉く宿衛兵を代え去る。盧志を表して中書監と為し、鄴に留まりて、丞相府の事を參署せしむ。

■ 〔司馬顓は敗れる〕 河間王の顓は軍を鄭（京兆郡の県、陝西省關中道華県の境、渭南市華州区）に頓め、東軍の聲援を為す、劉沈は兵起るを聞き、還りて渭城（秦の咸陽）に鎮し、督護の虞夔（続、虞遵夔×）を遣わして好畤（陝西省關中道乾県、現・咸陽市乾県）に逆え戦う。夔の兵は敗れ、顓は懼れ、退きて長安に入り、急に張方を召す。方は洛中の官私の奴婢萬餘人を掠め而して西す。軍中は食乏しく、人を殺し牛馬の肉を雜ぜ之を食す。

■ 〔劉沈は司馬顓を長安に攻め、敗れる〕 劉沈は渭を渡り而して軍し、顓と戦い、顓は屢々敗れる。沈は安定太守の衙博、功曹の皇甫澹をして精甲五千を以て長安を襲わしめ、其の門に入り、力戦して顓の帳下に至る。沈の兵は來たること遅く、馮翊太守の張輔は其の繼無きを見、兵を引いて之を横撃し、博及び澹を殺し、沈の兵は遂に敗れ、餘卒を収めて而して退く。張方は其の將の敦偉を遣わして夜之を撃ち、沈の軍は驚き潰え、沈は麾下と南に走り、追いて之を獲る。沈は顓に謂って曰く、

「知己（顓は沈を留めて軍師と為し、遂に雍州刺史と為す）之恵みは軽く、君臣之義は重く、沈は以て天子之詔に違ひ、強弱を量りて以て苟くも全くす可からず。袂を投じる之日、之に必死を期す、蒞醢（続は蒞醢）之戮は、

其の甘きこと ^{なすな} 薺の如し（詩に曰く、誰か茶を苦しと謂う、其の甘きこと薺の如し。）」

顓は怒り、之を鞭ち而して後腰斬す。新平太守の江夏の張光は數々沈の為に計を畫す、顓は執り而して之を詰り、光は曰く、

「劉雍州は鄙計を用いず、故に王（統は大王）をして今日に有るを得令む！」

顓は之を壯とす。引きて與に歡宴し、表して右衛司馬と為す。（5-213p）

成漢 **〔羅尚は江陽に移り、劉弘が流民をなだめる〕** 羅尚は逃げて江陽（四川省永寧道瀘県、現・瀘州市瀘県）四川省に至り、遣使して狀を表し、尚に詔して ^{かり} 權に巴東、巴郡、涪陵（三郡は元梁州）を統べ以て軍賦を供せしむ。尚は別駕の李興を遣わして鎮南將軍の劉弘に詣りて糧を求めしめ、弘の綱紀（參左にして一府の綱紀を操持する）は運道阻遠にして、且つ荊州は自ら空乏するを以て、零陵の米五千斛を以て尚に與えんと欲す。弘は曰く、

「天下は一家にして、彼此は異なる無し、吾は今之を給せば、則ち西顧之憂い無からん矣。」

遂に三萬斛を以て之に給（統・結×）し、尚は頼りて以て自ら存す。李興は留まりて弘の參軍と為るを願ひ、弘は其の手版を奪ひ而して之を遣る。又た治中の何松を遣わして兵を領して巴東に屯し尚の後繼と為さしむ。時に於いて流民の荊州に在（統、有×）る者は十餘萬戸、羈旅貧乏にして、多く盜賊と為り、弘は大いに其の田及び種糧を給し、其の賢才を擢き、資に隨いて敘して用ひ、流民は遂に安ず。

【司馬越と司馬穎の抗争】

■ **二月**（元嘉曆三月），乙酉（21-5+1=17 日），丞相の穎は表して皇后の羊氏を廢して、金墉城に幽し、皇太子の覃を廢して清河王と為す。

■ **〔陳敏は石冰を破る〕** 陳敏は石冰と戦ふこと數十合、冰の衆は敏の十倍、敏は之を撃ち、向かう所皆な捷ち、遂に周玘と合わせて冰を建康に攻める。**三月**（元嘉曆三月閏月），冰は北に走り、封雲に投じ、雲の司馬の張統は冰及び雲を斬り以て降り、揚、徐の二州は平らぐ。周玘、賀循は皆な衆を散じて家に還り、功賞を言わず。朝廷は陳敏を以て廣陵相と為す。

■ **〔司馬越是洛陽で兵を挙げ、鄴の司馬穎を討たんとす〕** 河間王の顓は表して丞相の穎を立てて太弟と為すを請う。戊申（44-34+1=11 日），詔して穎を以て皇太弟、都督中外諸軍事と為し、丞相は故の如し。大赦す。乘輿服御は皆な鄴に遷し（天子は洛陽にいて、移すは非なり），制度は一に魏の武帝の故事の如し。顓を以て大宰、大都督、雍州牧と為す。前太傅の劉實を太尉と為す。實は老を以て、固く譲りて拜さず。太弟の穎の僭侈は日々甚しく、劈幸は事を用ひ、大いに衆望（時の人は穎に輔弼の任を期待した）を失う。司空の東海王の越是、右衛將軍の陳眕、及び長沙王の故將の上官巳等と之を討つを謀る。**秋、七月**，丙申（1 日、元嘉曆一致）朔、陳眕は兵を勒して雲龍門に入り、詔を以て三公百僚を召し殿中（三部の諸將）に入（統、及×）れ、戒嚴して穎を討ち、石超は鄴に奔る。戊戌（34-32+1=3 日），大赦し、皇后羊氏及び太子覃を復す。己亥（35-32+1=4 日），越是帝を奉じて北征す。越是を以て大都督と為す。前侍中の嵇紹（又の時に侍中）を征して行在に詣らしむ。侍中の秦准は紹に謂って曰く、

「今往けば、安危は測り難し、卿は佳馬有る乎？」

紹は正色して曰く、

「臣子は乘輿を扈衛し、死生之を以てし、佳馬は何をか為さん！」（5-214p）

■ **〔司馬越来襲で司馬穎は動揺〕** 越是檄して四方の兵を召し、赴く者は雲集し、安陽（魏郡の県、鄴城南十里、

現・河南省河北道安陽県、現・安陽市安陽県）に至る比、衆は十餘萬、鄴中は震恐す。穎は群僚を會して計を問ひ、東安王の繇は曰く、

「天子は親征す、宜しく甲を釋きて縞素し出でて迎えて罪を請うべし。」

穎は従わず、石超を遣わして衆五萬を帥いて拒み戦わしむ。折衝將軍の喬智明は穎に乘輿を奉迎するを勧め、穎は怒りて曰く、

「卿は事を曉るに名あり、身を投じて孤に事える。今主上は群小の逼る所と為り、卿は奈何ぞ孤をして手を束ねて刑邪に就か使めんと欲すや！」

■ 〔石超は帝を急襲し、鄴に連れ去る、嵇紹の忠節〕 陳眕の二弟の匡、規は鄴より行在に赴き、
「鄴中が皆な已に離散す」

と云い、是に由り甚だ備えを設けず。己未（55-32+1=24 日）、石超の軍は奄^{たちま}ち至り、乘輿は蕩陰（魏郡の県、河南省河北道蕩陰県、現・安陽市湯陰県）に敗績し、帝は頬に傷つき、三矢に中たり、百官侍御は皆な散る。嵇紹は朝服して、馬を下り輦に登り、身を以て帝を衛り、兵人は紹を輦中に引きて之を斫る。帝は曰く、
「忠臣也、殺す勿かれ！」

對えて曰く、

「太弟の令を奉じる、惟だ陛下一人を犯さざる耳！」

遂に紹を殺す。血は帝衣に濺ぐ。帝は草中に墮ち、六璽を亡う。石超は帝を奉じて其の營に幸せしめ、帝は餒うること甚し、超は水を進め、左右は秋桃を奉じる。穎は盧志を遣わして帝を迎える。庚申（56-32+1=25 日）、鄴に入る。大赦し、改元して建武と曰う。左右は帝の衣を浣わんと欲す。帝は曰く、
「嵇侍中の血は、浣う勿かれ也！」

■ 〔司馬越は東海に逃げる〕 陳眕、上官巳等は太子の軍を奉じて洛陽を守る。司空の越は下邳に奔り、徐州都督の東平の王楸は納れず、越は徑ちに東海に還る。太弟の穎は越の兄弟（続、兄北弟×）の宗室之望なるを以て、下令して之を招き、越は命に應じず。前の奮威將軍の孫惠は上書して越に邀して藩方を結（続は要結）び、同じく王室を奨けんを勧む。越は惠を以て記室參軍と為し、與に謀議に參ぜしむ。北軍中候の苟晞は范陽王の虓（許昌に鎮す）に奔り、虓は制を承て晞を以て兗州刺史を行わしむ。

【王浚・司馬睿の逃亡成功】

■ 〔王浚は天の助けで命拾い〕 初め、三王（前卷永寧元年にあり）之兵を起こして趙王の倫を討つ也、王浚は衆を擁して兩端を挟み、所部の士民に禁じて三王の召募に赴くを得ざらしむ。太弟の穎は之を討たんと欲し而して未だ能わず、浚（続、濬×）の心も亦た穎を圖らんと欲す。穎は右司馬の和演を以て幽州刺史と為し、密かに浚を殺さ使めんとす。演は烏桓の單于の審登と謀り、浚と薊城の南の清泉に遊び、因りて而して之を圖る。會々天は暴雨となり、兵器は沾濕^{てんしゅう}し、果たさず而して還る。審登は以て浚が天の助けを得ると為し、乃ち演の謀を以て浚に告げる。浚は審登と密かに嚴兵し、并州刺史の東嬴公の騰に約し共に演を圍み、之を殺し、自ら幽州（刺史）の營兵を領す。騰は、越之弟也。太弟の穎は詔稱して浚を征し、浚は鮮卑の段務勿塵、烏桓の羯朱及び東嬴公の騰と同じく兵を起こして穎を討ち、穎は北中郎將の王斌及び石超を遣わして之を撃たしむ。（5-215p）

■ 〔司馬睿の鄴からの逃亡成功〕 太弟の穎は東安王の繇の前議（縞素して帝を迎える議）を怨み、八月，戊辰（4-2+1=3 日）、繇を収め、之を殺す。初め、繇の兄の琅邪恭王の覲は薨じ、子の睿（東晉元帝）が嗣ぐ。睿は沈敏にして度量有り、左將軍と為り、東海（司馬越の）參軍の王導と善し。導は、敦之從父の弟也。識量

は清遠なりて、朝廷の多故なるを以て、毎に睿に國に之くを勧める。繇の死するに及び、睿は帝に従いて鄴に在り、禍の及ぶを恐れ、將に逃げ歸らんとす。穎は先ず諸關（關所）津（船着き場）に敕して、貴人の出るを得る無からしむ。睿は河陽に至り、吏の止める所と為る。從者の宋興は後より來たりて、鞭を以て睿を拂い而して笑いて曰く、

「捨長（守舎の長）、官は貴人を禁ず、汝は亦た拘せ被るる邪？」

吏は乃ち過ずるを聽す。洛陽に至り、太妃の夏侯氏を迎え俱に國に歸る。丞相の從事中郎の王澄は孟玖の奸利の事を發き、太弟の穎に之を誅するを勧め、穎は之に従う。

■上官巳は洛陽に在り、殘暴にしてた縦横なり。守河南尹の周馥は、浚（周浚は王渾に従つて吳を伐つ戦功有り）之從父の弟也、司隸の滿奮等と之を誅せんと謀る。事は洩れ、奮等は死し、馥は走り、免かるるを得る。司空の越之太弟の穎を討つ也、太宰の顗は右將軍、馮翊太守の張方を遣わして兵二萬を將いて之を救わしめ、帝の巳に鄴に入るを聞き、因りて方に命じて洛陽に鎮せしむ。巳は別將の苗願と之を拒み、大いに敗り而して還る。太子の覃は夜巳、願を襲い、巳、願は出でて走る。方は洛陽に入る。覃は廣陽門（洛陽の西面南頭の第一門）に於いて方を迎え而して拜し、方は下車して扶け之を止める。復た覃及び羊后を廢す。

【匈奴劉淵の自立】

■[司馬穎は匈奴の劉淵・劉聰父子を重用] 初め、太弟の穎は匈奴の左賢王の劉淵（楊駿が五部大都督と為し、元康末の匈奴反乱に坐して罷免、穎改めて採用）を表して冠軍將軍と為し、五部の軍事を監ぜしめ、兵を將いて鄴に在ら使む。淵の子の聰は、驍勇人を絶し、博く經史に涉り、善く文を屬し、弓三百斤を彎く。弱冠にして京師に遊び、名士は與に交わざる莫し。穎は聰を以て積弩將軍と為す。

■[匈奴は劉淵を大單于に推挙] 淵の從祖の右賢王の宣は其の族人に謂つて曰く、

「漢の亡ぶより以來、我が單于是徒だ虚號のみ有り（67 卷漢獻帝建安 21 年にあり）、復た尺土無し。自餘の王侯は、降りて編戶（平民、比屋連次して居り、民籍に編せられ、高下の差無し）に同じ。今吾が衆は衰えたりと雖も、猶ほ二萬を減ぜず、奈何して手を斂めて役を受け、奄^{たちま}ち百年を過ぎる！左賢王の英武は世を超え、天は苟くも匈奴を興すを欲せざれば、必ず虚しく此の人を生ぜざる也。今司馬氏は骨肉相い殘^{そこな}い、四海は鼎のごとく沸き、呼韓邪之業を復せんこと、此れ其の時矣！」

乃ち相い與に謀り、淵を推して大單于と為し、其の黨の呼延攸（漢書匈奴傳に呼延氏あり）をして鄴に詣りて之を告げ使む。

■[劉淵は司馬穎に匈奴五部動員を説く] 淵は穎に白し、歸りて葬に會さんと請い、穎は許さず。淵は攸をして先に歸ら令め、宣等に告げて五部及び雜胡を招集し、穎を助けると聲言せ使め、實は之に叛せんと欲す。王浚、東嬴公の騰の兵を起こすに及び、淵は穎を説いて曰く、

「今二鎮（幽州・并州）は跋扈し、（5-216p）衆は十餘萬、恐らくは宿衛及び近郡の士衆の御す能う所に非ざる也、請う殿下の為に還りて五部を説き、以て國難に赴かん。」

穎は曰く、

「五部之衆は、果たして發す可きや否や？就^{たと}い能く之を發すとも、鮮卑、烏桓は、未だ當り易からざる也。吾は乘輿を奉じ洛陽に還り以て其の鋒を避け、徐に檄を天下に傳え、以て逆順之を制せんと欲す、君の意は何如？」

淵は曰く、

「殿下は武皇帝之子なり、大勳は王室に有り、威恩は遠く著われ、四海之内は、孰か殿下の為に死力を盡

くすを願わざる者あるや！何の發し難き之れあるや！王浚は豎子なり，東嬴は疏屬（司馬騰は宣帝の弟東武侯の孫）なり，豈に能く殿下と衡を爭そわん邪！殿下が一たび鄴宮を發すれば，弱きを人に示すなり，洛陽は得て而して至る可からず。洛陽に至ると雖も，威權は復た殿下に在らざる也。願はくは殿下は士衆を撫勉し，靖んじて以て之を鎮めよ，淵は請う殿下の為に三部を以て東嬴を摧き，三部にて王浚を梟し，二豎之首は，日を指して而して懸ける可き也。」

穎は悦び，淵を拜して北單于と為し，丞相の軍事に參ぜしむ。

匈奴 **「劉淵は大單于として離石で自立」** 淵は左國城（匈奴左部の居城、山西省冀寧道離石県、現・呂梁市離石区）に至り，劉宣等は大單于之號を上り，二旬之間に，衆五萬有り，離石（山西省冀寧道離石県、現・呂梁市離石区）に都し，聰を以て鹿蠡（漢の時の谷黎王と同じ、匈奴の藩王の称号、單于の下）王と為す。左於陸王の宏を遣わして精騎五千を帥いて，穎の將の王粹に會し東嬴公の騰を拒がしむ。粹は已に騰の敗る所と為る，宏は及ぶ無く而して歸る。

■ **「王浚に怯え帝は鄴から洛陽に逃亡」** 王浚、東嬴公の騰は兵を合わせて王斌を撃ち，大いに之を破る。浚は主簿の祁弘を以て前鋒と為し，石超を平棘（直隸省保定道樂城縣、現・石家莊市樂城區）に敗り，勝ちに乗りて進軍す。候騎は鄴に至り，鄴中は大いに震え，百僚は奔走し，士卒は分散す。盧志は穎に帝を奉じて洛陽に還るを勧める。時に甲士は尚ほ萬五千人有り，志は夜部分し，曉に至りて將に發せんとし，而して程太妃は鄴を戀いて去るを欲せず，穎は狐り疑いて未だ決せず。俄に而して衆は潰え，穎は遂に帳下の數十騎を將いて志と帝を奉じて犢車（諸侯の乗る車、格下）に御し南に洛陽に奔る。倉猝は上下贍（続、持ち歩く財用、繼×）無く，中黃門の被囊の中に私錢三千を贍（続、繼×）す，詔して之を貸り，道中に於いて飯を買い，夜則ち中黃門の布被を御し，食するに瓦盆を以てす。溫（河南省河北道溫縣、焦作市溫縣）に至り，將に陵（司馬懿は溫縣の出身、歴代陵有り）に謁せんとし，帝は履を喪い，從者之履を納れ，下り拜して流涕す。河を濟るに及び，張方は洛陽より其の子の羆を遣わして騎三千を帥いて，乗る所の車を以て帝を奉迎す。（帝は）芒山の下に至り，方は自ら萬餘騎を帥いて帝を迎える。方は將に拜謁せんとし，帝は車を下りて自ら之を止める（周の夷王が堂を下りて諸侯を見るより甚だし）。帝は宮に還り，奔散する者は稍く還り，百官は粗ぼ備わる。辛巳（7-2+1=6日），大赦す。

■ **「王浚は司馬穎を追撃及ばず、薊に還る」** 王浚は鄴に入り，士衆は暴掠し，死者は甚だ衆し。烏桓の羯朱をして太弟の穎を追わしめ，朝歌に至り，及ばず。浚は薊に還り，（5-217p）鮮卑の多く人婦女を掠めるを以て，命ず、

「敢えて挾み藏す者有れば斬る！」

是に於いて易水に沈む者は八千人。

■ 東嬴公の騰は師を拓跋猗遄に乞い以て劉淵を撃つ，猗遄は弟の猗盧と兵を合わせて淵を西河に撃ち，之を破り，騰と汾東に盟し而して還る。

■ **「劉淵は大望を懷く」** 劉淵は太弟の穎が鄴を去るを聞き，歎じて曰く、

「吾が言を用いず，逆に自ら奔潰す，真に奴才也！然れども吾は之と言有り矣，以て救わざる可からず。」將に兵を發して鮮卑、烏桓を撃たんとし，劉宣等は諫めて曰く、

「晉人は奴隸として我を御す，今其の骨肉は相い殘み，是れ天は彼を棄て而して我をして呼韓邪之業を復せしむ也。鮮卑、烏桓は，我之氣類（同類）なり，以て援と為す可し，奈何して之を撃つや！」

淵は曰く、

「善し！大丈夫は當に漢高、魏武に為らん、呼韓邪は何ぞ效^なうに足る哉！」

宣等は稽首して曰く、

「及ぶ所に非ざる也！」

■荊州の兵は張昌（前年下雋山に逃げる）を擒斬し、同黨は皆な三族を夷げる。

【蜀の漢と匈奴の漢の成立】

成漢 **〔李雄は成都王に即位〕** 李雄は范長生の名徳有り、蜀人の重き所と為るを以て、迎えて以て君と為し而して之の臣たらんと欲し、長生は可からず。諸將は固く雄に尊位に即くを請う。冬、十月、雄は成都王の位に即き、大赦し、改元して建興と曰う。晉の法を除き、法七章を約す。其の叔父の驤を以て太傅と為し、兄の始を太保と為し、李離を太尉と為し、李雲を司徒と為し、李璜を司空と為し、李國を太宰と為し、閻式を尚書令と為し、楊褒を僕射と為す。母の羅氏を尊びて王太后と為し、父の特を追尊して成都景王と為す。雄は李國、李離の智謀有るを以て、凡そ事は必ず咨り而して後に行い、然れども國、離は雄に事えること彌々謹めり。

匈奴漢 **〔劉淵は国号を漢とする〕** 劉淵（字は元海）は都を左國城に遷し、胡、晉の之に歸する者は愈々衆し。

淵は群臣に謂って曰く、

「昔漢は天下を有つこと久しく長し、恩は民に結ぶ。吾は、漢氏之甥なり、約して兄弟と為る。兄亡びて弟紹ぐは、亦た可からず乎！」

乃ち國號を建てて漢と曰う。劉宣等は尊號を上らんと請い、淵は曰く、

「今四方は未だ定まらず、且く高祖が漢王を稱するに依る可し。」

是に於いて漢王の位に即き、大赦し、改元して元熙と曰う。安樂公の禪（蜀の劉禪）を追尊して孝懷皇帝と為し、漢の三祖（劉邦・光武帝・劉備）、五宗（太宗・世宗・中宗・顯宗・肅宗）の神主を作り而して之を祭る其の妻の呼延氏を立てて王后と為す。右賢王の宣を以て丞相と為し、崔游を御史大夫と為し、左於陸王の宏を太尉と為し、范隆を大鴻臚と為し、朱紀を太常と為し、上黨（統、常×）の崔懿之、後部人の陳元達を皆な黃門郎と為し、族子の曜を建武將軍と為す。游固は辭して就かず。（劉淵は漢の制度を踏襲）

匈奴漢 **〔陳元達と劉淵の信頼関係〕** 元達は少くして志操有り、淵は嘗て之を招き、元達は答えず。淵が漢王に為るに及び、或は元達に謂って曰く、

「君は其れ懼れる乎？」

元達は笑いて曰く、

「吾は其の人を久しく知る矣、彼も亦た吾之心を亮す。但だ恐らくは三、二日を過ぎずして、驛書は必ず至らんと。」

其の暮、淵は果たして元達を征す。元達は淵に事え、(5-218p) 屢々忠言を進め、退きて而して草を削り、子弟と雖も知るを得る莫し也。

匈奴漢 **〔劉曜の孤高を劉聰は理解〕** 曜は生まれ而して眉白く、目には赤光有り、幼くして聰慧、膽量有り、早く孤となり、淵に養われる。長ずるに及び、儀觀は魁偉にして、性は拓落（恢弘磊落）高亮、衆と群れず。讀書を好み、善く文を屬す、鐵の厚さ一寸を、射て而して之を洞く。常に自ら樂毅及び蕭（蕭何）、曹（曹參）に比し、時の人は之を許す莫き也。惟だ劉聰のみは之を重んじ、曰く、

「永明（劉曜の字）は、漢の世祖、魏武之流れなり、數公（樂毅・蕭何・曹參）は何ぞ道うに足りん哉！」

■ **〔混乱の收拾策〕** 帝は既に洛陽に還り、張方は兵を擁して専ら朝政を制し、太弟の穎は復た事に豫かるを得ず。豫州都督の范陽王の虓、徐州都督の東平王の楸等は上言す、

「穎は負荷するに克たず、宜しく降して一邑に封じ、特に其の命を全くすべし。太宰（河間王頔）には宜しく委ねるに關右之任を以てし、州郡より以下、選舉の授任は、一に皆な成を仰ぐべし。朝之大事は、廢興損益は、毎に輒ち疇咨（諮問）すべし。張方は國の為に節を效す、而も變通に達せず、未だ即ち西に還らず、宜しく遣りて郡（馮翊）に還し、方に加える所の官は、請う悉く舊の如くすべし。司徒の戎、司空の越、並びに國に忠なれども小心なり、宜しく機事を干し、委ねるに朝政を以てすべし。王浚は社稷を定める（司馬穎を討つ）之勳有り、宜しく特に崇重し、遂に幽朔を撫し、長く北籓と為すべし。臣等は力を竭くして城を扞ぎ、皇家の籓屏たれば、則ち陛下は垂拱して、四海は自ら正さん矣。」

■ **〔張方は帝を確保し、洛陽を焼こうとする〕** 張方は洛に在ること既に久しく、兵士は剽掠して殆ど竭き、衆情（張方の軍情）は喧喧として、復た留まる意無し、議して帝を奉じて長安に遷都せんと欲す。帝及び公卿の従わざるを恐れ、帝の出ずるを須ち而して之を劫やかさんと欲す。乃ち帝に廟を謁するを請い、帝は許さず。十一月、乙未（31-31+1=1 日）、方は兵を引いて殿に入り、乗る所の車を以て帝を迎え、帝は馳せて後園の竹中に避ける。軍人は帝を引いて出し、逼りて車に上らせめ、帝は泣を垂れて之に従う。方は馬上に稽首して曰く、

「今寇賊は縦横して、宿衛は單少なり、願はくは陛下は臣の壘に幸すべし、臣は死力を盡くして以て不虞に備えん。」

時に群臣は皆な逃げ匿れ、唯だ中書監の盧志は側に侍り、曰く、

「陛下の今日之事は、當に一に右將軍（張方）に従うべし。」

帝は遂に方の壘に幸し、方をして車を具え宮人、寶物を載せ令む。軍人は因りて後宮を妻略し、府藏を分爭し、流蘇（五采の毛を雜えて作る房）、武帳を割きて馬幃と為す、魏、晉以來の蓄積は、地を掃いて遺る無し。方は將に宗廟、宮室を焚き以て人の返顧之心を絶たんとす、盧志は曰く、

「昔董卓は無道にして、洛陽を焚燒し（59 卷漢獻帝初平元年にあり）、怨毒之聲は、百年猶ほ存す、何為れぞ之を襲うや！」

乃ち止む。

■ **〔帝は長安入城〕** 帝は方の壘に三日停まり、方は帝及び太弟の穎、豫章王の熾等を擁して長安に趨き、（5-219p）王戎は出でて邠（襄城郡の県、河南省河洛道邠県、現・三門峽市陝州区）に奔る。太宰の頔は官屬歩騎三萬を帥いて霸上に迎え、頔は前みて拜謁し、帝は下車して之を止める。帝は長安に入り、征西府（征西將軍の頔の府）を以て宮と為す。唯だ尚書僕射の荀藩、司隸の劉放、河南尹の周馥等は洛陽に在り留臺と為り、制を承けて事を行い、東（洛陽）、西臺（長安）と號す。藩は、勛之子也。丙午（42-31+1=12 日）、留臺は大赦し、改元して復た永安と為す。辛丑（37-31+1=7 日）、皇后の羊氏を復す。

成漢 羅尚は移りて巴郡に屯し、兵を遣わして蜀中を掠し、李驤の妻の咎氏及び子の壽を獲る。

■ **〔長安・洛陽の二都〕** 十二月、丁亥（23-0+1=24 日）、太弟の穎に詔して成都王を以て第に還らしむ。更に豫章王の熾を立てて皇太弟と為す。帝の兄弟は二十五人、時に存する者は惟だ穎、熾及び吳王の晏なり。晏は材質庸下なり。熾は冲素にして學を好み、故に太宰の頔は之を立つ。詔して司空の越を以て太傅と為し、頔と與に帝室を夾輔せしめ、王戎をして朝政に參録せしむ。又た光祿大夫の王衍を以て尚書左僕射と為す。高密王の略を鎮南將軍と為し、司隸校尉を領し、權に洛陽に鎮せしむ。東中郎將の模を寧北將軍、都督冀州諸軍事と為し、鄴に鎮ぜしむ。百官は各々本職に還る。州郡に令して苛政を蠲除し、民を愛

し本を務めしめ、

「清通之後は、當に東京に還るべし。

大赦し、改元す。**略**、**模**は、皆な**越**之弟也。**王浚**は既に鄴を去り、**越**は**模**をして之に鎮ぜ使む。**顓**は四方乖離して禍難已まざるを以て、故に此の詔を下して之を和解し、少安を獲ることを冀う。**越**は太傅を辭して受けず。又た詔して太宰の**顓**を以て中外諸軍事を都督せしむ。**張方**を中領軍と為し、尚書事を録し、京兆太守を領せしむ。

■ 〔司馬騰は劉淵を攻める〕 東嬴公の**騰**は將軍の**聶玄**を遣わして漢王の**淵**を撃たしめ、大陵（太原郡の県、山西省冀寧道文水県、現・吕梁市文水県）に戦い、**玄**の兵は大いに敗る。

■ 〔劉曜は太原等を取る〕 **淵**は**劉曜**を遣わして太原を寇し、**苻氏**（上黨郡の県、山西省冀寧道高平県、現・晋城市高平市）、**屯留**（上黨郡の県、山西省冀寧道屯留県、現・長治市屯留区）、**長子**（上黨郡の県、山西省冀寧道長子県、現・長治市長子県）、**中都**（太原郡の県、山西省冀寧道平遙県、現・晋中市平遙県）を取る。又た冠軍將軍の**喬晞**を遣わして西河を寇し、**介休**（山西省冀寧道介休県、現・晋中市介休市）を取る。介休の令の**賈渾**は降らず、**晞**は之を殺す。將に其の妻の**宗氏**を納れんとし、**宗氏**は**晞**を罵り而して哭す、**晞**は又た之を殺す。**淵**は之を聞き、大いに怒りて曰く、「天道をして知る有ら使めば、**喬晞**は種有るを望まん乎！」

追い還し、秩四等を降し、**渾**の屍を収め、之を葬す。

令和4年2月6日	書下し開始	10388 文字
令和4年2月13日	書下し終了	21394 文字
令和4年3月13日	年表修正	21450 文字